

# 放送番組センターレポート

BROADCAST PROGRAMMING CENTER OF JAPAN Report

公益財団法人 放送番組センター

〒231-0021 横浜市中区日本大通 11 横浜情報文化センター  
TEL.045-222-2881 FAX.045-641-2110 <https://www.bpcj.or.jp/>

## ■ 5か年の事業方針〈2023～2027年度〉 ～より開かれた“全国放送番組アーカイブ”を目指して～

放送番組センターでは、事業を行うにあたり『5か年の事業方針』を立て、それに基づいて年度ごとの事業計画を策定している。現行の2018～2022年度事業方針は本年度で終了することから、昨年度末、2023年度からの次期事業方針について検討を重ねてきた。事業運営委員会できりまとめた次期方針は、10月28日開催の理事会で承認された。

今回の『5か年の事業方針』は、「より開かれた“全国放送番組アーカイブ”を目指して」というサブタイトルを付し、6つの事業方針のもと、新しい時代に対応した事業の在り方と、当センターが果たすべき役割を示している。方針の骨子は以下のとおり。

### 【事業方針 骨子】

#### 1. アーカイブの価値最大化

放送史の記録として、時代を反映した番組や、ローカル放送局が制作した秀作番組をはじめ、幅広い番組の確実な収集・保存に努める。また、「より開かれたアーカイブ」として、番組の公開を様々な形で促進し、社会共有の「文化資産」であるアーカイブの存在価値の最大化を目指す。

#### 2. アクセスポイントの全国拡大

番組アーカイブへの接触機会を全国

に拡大させるため、新たにスタートする「全国放送番組アーカイブ・ネットワーク(略称:番組アーカイブネット)」の展開を段階的に進め、放送番組の魅力を幅広く伝えるとともに、番組を通じた情報や知見の提供により地域社会に貢献する。ローカル放送局の優れた番組を、より多くの人々が視聴できるようにすることで、放送文化の更なる発展に寄与する。



▲番組アーカイブネット構想の概念図

#### 3. 教育利用の充実と放送文化の理解促進

番組の教育利用の対象を高校や中学などに広げるとともに、利便性向上を図り、利用校の増加を目指す。また、放送ライブラリー施設を、放送を学び、番組視聴を通じた調査研究ができる拠点として整備することや、企画展、番組上映会、セミナーの開催などを通じ、若い世代を中心に放送への理解と関心を高めることに努める。



▲筑紫女学園大学での番組利用

#### 4. 戦略的広報への転換

広報機能を強化し、センターの役割や事業の認知度を向上させる。広報対象ごとに内容や方法を分析・設定し、WEBやSNS等デジタル手法も活用した戦略的広報への転換に取り組む。

#### 5. 放送事業への貢献

放送事業者との連携を更に強化し、放送文化の理解促進と放送事業への貢献に努める。

#### 6. 財務運営と抜本的基盤整備

新規事業の展開に必要な費用は、経費節減と既存事業の見直しにより可能な限り財源確保に努める。期間中に想定される事業運営に欠かせない設備整備は、原則として基本財産を活用することで確実に実施し、将来の効率的運営に資する抜本的な基盤整備にあたる。

## ■番組アーカイブの意義と未来への活用2022 ～教育・研究利用の新たな展開

11月21日、上智大学メディア・ジャーナリズム研究所と共催で公開セミナーを上智大学で開催し、併せてリアルタイム配信を行った。6回目となる今回は、番組を授業で利活用した大学教員、番組制作者、また番組の教育現場での活用に取り組む放送事業者が、活用事例発表のほか、番組を活用する側、される側としてその意義を語った。

【登壇者】松山秀明（関西大学）  
奥田雅治（毎日放送）  
加藤久仁（NHKエンタープライズ）  
【司会】音好宏（上智大学）



2017年度より毎年開催している本セミナーでは、放送ライブラリーの公開番組を授業で利用した大学教員や公共施設の担当者、放送局員が事例報告を行ってきた。本年は、当センターの番組利活用の現状と各登壇者の取り組みの報告後、大学での授業の成果や、番組アーカイブ利活用の新たな展開の可能性について、ディスカッションを行った。



松山准教授は、今年度の授業で毎日放送と連携講座を行った。毎日放送の『映像』シリーズのディレクターを中心に、カメラマンや海外特派員など、様々な業務に携わる毎日放送の局員がリレー形式で毎週登壇し、講義とディスカッションを行うものである。学生は、放送番組センターの仕組みを使用して事前に番組を視聴してから授業に臨んだ。この連携講座を通じ、「事前に見た番組の制作者が実際に来ること

の意味はとても大きかった。生身の人間が番組を作っていることに視聴者は気づきにくい」「放送番組のアーカイブ利用は成熟期に入ったと思う。これからは、更に何ができるか、できないかの話を深める時代に入ったと思う」と話した。



奥田氏は、毎日放送で1980年から続くドキュメンタリー『映像』シリーズに携ってきた。40年間で500本にもものぼる作品の数々を見直すうち、「このアーカイブを見てもらう方法はないだろうか」と考え、シンポジウムやアーカイブ配信、関西大学や上智大学等で反転授業（自宅で映像を視聴してから授業を行う授業形態）を実施した。受講生の感想から「学生たちにとっても、新しい授業の受け方となり、おおむね好評だった」と振り返った。



加藤氏は、NHKで番組編成や著作権関連の業務に携わってきた。「番組などの動画コンテンツは文献に勝るとも劣らない一級の学術資料でもある」「政治、文化、芸術、社会問題などあ

らゆる事象が映像に記録されている。貴重な資料をできるだけ社会に還元していきたい」と考え、NHKエンタープライズが大学向けに提供する『オンライン授業用番組ライブラリー』を立ち上げた経緯を語った。

### ■パネルディスカッション

奥田氏は番組制作者としての立場から、反転授業について「若い人たちの声を直接聞けるのは非常に新鮮で発見もある」「深く多様な質問をもらえる機会が増え、登壇した局員たちからは『非常に手応えを感じた』という意見が多かった」と振り返った。

加藤氏は、映像を使って学ぶことについて「若い人は、情報を得るのにも、友達とのコミュニケーションにも、遊ぶ時にも、SNSや配信サイトで映像を使っているのに、どういうわけか勉強する時には活字になる。映像は、学問や研究の手段や対象としてもっと活用されている」と語った。

松山准教授は、番組アーカイブの現状について「各地にあるアーカイブ機関や放送局同士が連携できていないことが問題。どの放送局にどれくらいの映像があるのか全く分からない。情報を集約し、どこに行けばどの番組を見られるかが分かるリストがあることが、一番の理想である」と話した。



最後に音教授が、「放送は、信頼性を担保できる情報を提供する装置である。現在の、そしてこれまでの放送番組を展開する場所としてアーカイブがあり、そのアーカイブを展開する場所として、大学や博物館、図書館等をネットワークしていくことが大事だと思う。それには日本的なやり方を構築することが必要だ」とセミナーを締めくくった。

## ■第52回名作の舞台裏『風神の門』

11月5日、ドラマのスタッフや出演者が自ら制作した番組を振り返る公開セミナー「名作の舞台裏」を開催した。第52回は、司馬遼太郎の同名小説が原作で、1980年にNHKで放送された痛快時代劇『風神の門』を取り上げた。

【ゲスト】三浦浩一（出演）

小野みゆき（出演）

金子成人（脚本）

【司会】渡辺紘史（演出・放送人の会）



戦国末期を舞台に、若き忍者たちが活躍する『風神の門』。セミナー前半は、三浦氏演じる霧隠才蔵と、小野氏演じるお国を中心に物語が展開する第3話と6話を続けて上映した。42年前の

作品ではあるが、当時の若者の熱いエネルギーが伝わってくる作品である。

本作には、若い出演者やスタッフが集まった。「キャスティングや構想も初めての若い人が参加し、一緒に作り上げた」と、当時若手の演出陣として携わった渡辺氏が振り返った。また脚本も、原作を大切にしながら、才蔵たちを人間らしく、若者らしく造形した。金子氏は「時代劇を初めて書いたが、江戸時代に入る前の戦国時代というのは決まり事が少なく、また忍者というどこにも属さない人物が主人公なので書きやすかった」と語った。

撮影時の様子について、小野氏は「(三浦氏とは) 全然話さなかった。な

んだか恥ずかしかった」と振り返ると、三浦氏は「共演者と台詞以外で日常会話を交わした覚えがない。緊張していて周りが見えていなかった」と続けた。二人は、「お国が、最初は才蔵を警戒しながらも次第に惹かれていくという物語と、自分たちの普通のぎこちなさが映像に出たのでは」と懐かしんだ。一方スタッフは、よく議論を交わした。予算や撮影技術に制約があったことから、撮影は工夫を凝らして行われた。渡辺氏や、会場に参加した当時の撮影担当・曾我部氏から、合戦シーンの裏話などが披露された。

最後に、本作への思いについて、三浦氏は「役者として、人間としての原点」、小野氏は「かけがえのない愛おしい作品。青春の1ページだった」と締めくくった。会場には、放送当時中学・高校生で、作品に夢中になった参加者も多く、それぞれの「青春の風神の門」を改めて叩くひと時となった。

## ■2022秋の人気番組展



10月15日～11月27日、地上8局・BS8局の協力を得て、恒例の「秋の人気番組展」を開催した。

コロナ禍前の賑わいには及ばないが、校外学習や遠足など学校行事での団体見学が今春や昨秋に比べて増加していることもあり、施設全体の来館者数も徐々に増加している。会場では、小・中学生が、各々興味のある番組ポスターの前で、番組の感想を話す姿が印象的だった。また、TBSのドラマ『クロサギ』や『君の花になる』のセット模型、テレビ神奈川のドラマ『信長未満』の衣装の展示(写真)の人气が高かった。

今回、初の試みとして、日本大学

芸術学部の協力のもと、学生レポーターによる会場取材の様態を収録し、YouTubeにて会期中に公開した(公開は終了)。遠方で会場まで足を運べない人にも、展示会場の雰囲気や各局ブースの見どころが伝わる動画となった。

## ■上映会 平和関連番組

9月16日～10月27日、番組を視聴する会「平和を伝える・記録する・考える ～国と国のはざままで～」を開催した。世界中で平和運動への気運が高まっていることを受け、時と国をまたぎ、戦争が命以外に奪ってきたものは何かを考える7本の番組を紹介した。上映番組は『悲劇の王女 川島芳子』(2005年・テレビ信州)、『NNNドキュメント'98 クラウディアからの手紙』(1998年・日本海テレビジョン)、『わたしは菊子、日本人です ある残留棄民41年目の証明』(1986年・中京テレビ)、『西武スペシャル 波の盆』(1983年・日本テレビ)、『ドラマドキュメンタリー 約束-ユエイエン』(2006年・北海道

放送)、『戦場に音楽の架け橋を ～指揮者 柳澤寿男コソボの挑戦～』(2009年・BSテレビ東京)、『50年目の遺言 ホロコーストと命のビザ 杉原千畝の決断』(1995年・名古屋テレビ放送)。

## ■上映会 クイズ番組特集

11月25日～1月15日、テレビ放送開始70年企画の第一弾として、「BLセレクション クイズ番組プレイバック」を開催した。1946年のラジオ番組『話の泉』から始まった日本のクイズ番組の歴史を、昭和・平成の人気番組から厳選した29本とともにたどった。NHKと民放の全国向け番組のほか、『白くまゲーム』(1952年・北陸放送)、『おとこ大学』(1956年・南日本放送)、『天才クイズ 1000回記念親子大会』(1986年・CBCテレビ)など、地域の人気番組も取り上げた。

2023年2月1日、日本のテレビは放送開始70年の節目を迎える。今後もテレビ放送史をたどる様々な番組の上映を予定している。

## ■公共施設での番組利活用

### 【夕張市拠点複合施設りすた（北海道）】

9月17日、市民向けの集団視聴が行われ、『東芝日曜劇場 帰郷』（1977/北海道放送）などの2本が上映された。続く10月29日、『みらいへの約束 ～東日本大震災から5年被災文化財を救え～』（2016/IBC岩手放送）が上映された。

### 【沖縄県立図書館】

11月3日、「としょかんまつり」の催事として集団視聴が行われ、『新春クイズバラエティー オキペディア』（2013/琉球放送）、『第34回民教協スペシャル サンマデモクラシー』（2020/沖縄テレビ放送）が上映された。

## ■教育機関での番組利活用

### 【早稲田大学】

秋学期、文化構想学部文芸ジャーナリズム論系「日本近代文学とマスメディア2」（鳥羽耕史教授）の授業で、

『サンヨーテレビ劇場 私は貝になりたい』（1958/TBSテレビ）、『今日を生きる』（1959/読売テレビ放送）、『御寮人さん』（1960/関西テレビ放送）など15本が利用された。

### 【日本大学】

秋学期、大学院新聞学研究科「映像ジャーナリズム論特殊講義」（米倉律教授）の授業で、『NNNドキュメント'94 風の叫び 中国人強制連行事件のいま』（1994/秋田放送）など8本が利用された。

### 【上智大学】

秋学期、文学部新聞学科「ジャーナリズムの現在Ⅱ」（音好宏教授）の授業で、『NNNドキュメント'98 クラウディアからの手紙』（1998/日本海テレビジョン放送）など4本が利用された。

### 【広島大学】

第4ターム、教養教育「日本国憲法」（畑浩人講師）の授業で、『NNNドキュ

メント'07 声の壁 発言できない議員』（2007/中京テレビ放送）など2本が利用された。

### 【神奈川県立相模田名高等学校】

2年生「現代文B」の授業で、『日本名作ドラマ ころも』（1994/テレビ東京、カズモ）が利用された。

### 【かえつ有明高等学校】

3年生「選択科目・国語総合」の授業で、『日本名作ドラマ ころも』（1994/テレビ東京、カズモ）が利用された。

## 【カレンダー】

2022/12/15-2023/1/29	テレビ放送開始70年 企画特別展示 Dr.コトー診療所
1/27-2/19	BLセレクション テレビ放送開始70年 企画 テレビが魅せた！伝えた！70年 ～「イ」の字から南極まで～

## 新公開番組 PICK UP!

### ぶちかませ！小町 ～泣き虫相撲っ娘の挑戦～

2019.05.25 / 山形放送  
ディレクター：佐藤愛未  
プロデューサー：山内正俊

「お兄ちゃんみたいになりたい！」酒田市に住む秋葉小町ちゃんは、アマチュア相撲世界一の兄に憧れ、6歳で相撲を始めた。師匠は82歳。かつては高校相撲部の顧問として厳しい指導に明け暮れたが、今は時代に合わせ、生徒の良いところを引き出すことを心がけている。小町ちゃんは男子に交じって稽古に励み、頭から大きくぶつかる「ぶちかませ」ができるようになるが、試合に負けると泣きながら「もう相撲をやめる」と弱音を吐くことも。師匠は「心技体の中で一番大切なのは心」と諭す。

4年目の秋。週5日の稽古に励み、ついに女子相撲の全国大会に出場することになった。師匠の教え「立ち合いを速く、前に出る相撲」を胸に、大柄な選手にも怯むことなく挑む小町ちゃ

ん。しかし、全国レベルの相手を前に、いつものスタイルを変えてみるのだが――。

女子相撲というマイナーなスポーツに、「強い兄への憧れ」という純粋な思いで飛び込んだ女の子の、4年間の成長記である。背が伸びていくだけでなく、トレーニング用のタイヤが重くなり、柔軟性が増し、強く大きくなっていく様子がありありと記録されている。

憧れの兄は、自分より体格の良い相手との試合で肩に大怪我を負い、悩んだ末に高校卒業を機に相撲をやめる。礼儀を重んじる相撲の世界、公式試合で思わずガッツポーズをして注意を受けた先輩は、それ以来おごり高ぶることのない精神力を培い大相撲の道へと進んだ。小町ちゃんを取り囲む人々の人生も織り交ぜながら、誰にとっても等しい歳月が描かれる。地域に密着した取材が続けられる、ローカル局ならではのドキュメンタリーである。ナレーション・羽佐間道夫氏の名調子も心地よい。

## 放送番組センターレポート からのお知らせ

機関紙『放送番組センターレポート』は、今号を持って紙媒体での発行を終了いたします。2009年11月の第1号以来、これまでお読みいただきありがとうございます。

今後は、noteをはじめとするWeb上での情報発信へと移行します。催事予定、開催レポート、セミナー抄録、施設外での利用実績、公開番組の紹介のほか、より充実した情報発信を行ってまいります。ぜひアクセスしてみてください。

放送ライブラリー note は  
こちら



## ◆放送ライブラリー公開番組数

テレビ番組18,669本／ラジオ番組5,012本／テレビ・ラジオCM12,200本／劇場用ニュース映画2,683項目（2022.12.31現在）